

東アジアの「文」と書物からみる人文学の形成

河野 貴美子

Formation of the Humanities:
The Case in East Asian Letters

Kimiko KONO

今日は、3名の先生方の貴重なお話をうかがい、たいへん勉強になりました。私自身は、日本における中国の学術と文化の受容ということの主たる研究テーマとして、奈良平安時代を中心に勉強して参りましたが、中国や韓国を訪れることも多く、そうした中で、近代以降の東アジアの学術交流や展開に日本が果たした役割、またその問題点にも関心をもっております。西洋の学問については全くの門外漢ではありますが、最近自分自身が興味あるいは疑問を抱いている点に絡めて感想を述べ、コメントとしたいと思います。

まず安酸敏真氏からは、冒頭に、日本の大学の学部名称と人文学、人文科学という言葉の定義の難しさについてお話がありました。私は先月(2014年11月)、韓国での学会に出かける機会があったのですが、シンポジウムが行われたのは漢陽大学の人文科学大学でした。韓国では、例えばソウル大学校も学部組織は「人文大学」「社会科学大学」「自然科学大学」等と編成されていて、例えば高麗大学校が用いている「文科大学」という名称よりも「人文」を用いることが多いようです。

一方中国では、人文学部という名称はあまり耳にしないように思い、辞書を引いてみると、「人文学」という単語は立項されておらず、また「人文科学」は、現代では「社会科学」の別称として用いる、とあります⁽¹⁾。そこで思い至るのが中国の人文社会科学を代表する学術研究機構⁽²⁾が、中国社会科学院と名のっていることです。しかし今回改めて

調べてみて知ったのですが、北京大学は「中国語文学系」「歴史学系」「哲学系」等をまとめて「人文学部」の名称をかぶせています⁽³⁾。しかし、復旦大学では、「中国語文学系」「哲学学院」「歴史学系」はそれぞれ独立していて、「人文」の名は見えません⁽⁴⁾。やはり大学学部や研究組織の名称と人文学の関係は一筋縄ではいかないようです。

なお、日本での状況は安酸氏のお話の通りですが、中国との関係で、また戦前の、早い段階における状況として触れておきたいのは、武藤秀太郎氏のお話にも出ましたが、1927年に、日本が義和団賠償金を用いて上海に自然科学研究所、北京に人文科学研究所を設立したことです。人文科学研究所は、日本による中国への文化侵略行為だとの批判もあり、その歩んだ道は平坦ではありませんでしたが、そこで行われた主な研究活動は、中国の古典籍の新たな叢書とその解題、『続修四庫全書提要』の編纂でした。「人文科学研究」と銘打って行われていたのは、実際には中国伝統の古典籍研究、中国学研究だったわけです。

さて、ここで「人文学」とは何か、ということを変更して考えてみたいのですが、安酸氏のお話の通り、それは人文主義、人間とその文化を探究する学問、フマニタス、ということであり、そうした西洋の学知を東アジアでも受け入れて近代の学問が形成された、ということなのですが、いま問題としたいのは、武藤氏のお話にもあったように、「人文」という言葉は古代中国にもあったこと、そしてそれ

は、『易経』においては「天文」と対の概念として提示されており⁽⁵⁾、「天文」（自然現象）に対して人間によって作り出される現象、人間が生み出すさまざまなものやこと、いわば文化の総体をさす謂であったことです。フマニタスと同じく、人間と文化に関わる、という点では、人文学と重なる部分も多いように思われますが、しかし漢語としての「人文」は、「人の文」ということ、つまり「文」の方を中心に構成された語彙であって、フマニタス、人の語と離れることがないヨーロッパの人文学とはやはり根本的な違いがあるのではないかと思います。

新川登亀男氏からのコメントにあげられていますように、中国伝統の「人文」の考え方は日本にも輸入され、早くは八世紀半ばに編纂された日本初の漢詩集『懐風藻』の序文に現れます。それをみますと、はじめ神武天皇が日本を建国した時には「天地は創造されたばかりで」「人文はまだおこっていなかった」、しかし、「風俗を教化し、身を徳で照り輝かせるには、文や学以外の手段はない」とあります⁽⁶⁾。ここでは「人文」の現れとして「文」と「学」がほぼ同義語として用いられています。「文学」とは広く社会や人を導く学問のことを指す、このことが近代以降の「文学部」という呼称にもつながっていくのでしょう。

そしてもう一点、問題として提起したいのは、漢語の世界において「文」が重視されたのは、そこで用いられた文字が漢字であったことが大きな要因であったのではないかと、ということです。漢字は一字一字が形と音と意味（形・音・義の三要素）を備えた文字であり、つまり、書かれることに大きな意味があった、だからこそ、中国では紀元前の古代から多くの文字が刻み残され、膨大な数の書籍が蓄積されたことです。漢字文化とは、書物の文化だともいえると思うのですが、中国においては、文字や文に対する追究が早くから行われていたわけで、今日の、逸見龍生氏の『百科全書』のお話を伺って興味深かったのは、中国古代の辞書や、初学者への啓蒙のために作成された百科事典（それを中国の場合、類書と呼びますが）、また古典テキストに対する注釈書のあり方と、西洋の古典文献とを比較してみると、お互いにとって面白いことがみえてくるのではないかと、ということです。例えば、中国では、漢字一字に意味がありますので、意義によって文字を分類する『爾雅』のような辞書が作られますが、

それはある意味百科事典的でもあります⁽⁷⁾。漢字の世界においては、文字、すなわち「文」を追究することが、そのままこの世界をどのように体系化して把握するかということ、さまざまな現象をどのように分類して、トータルとしてどのように認識するかということへとつながってくるわけです。したがって、「人文」というのは、そうした、漢字という特徴ある文字とともに文化を育んだ東アジアにおいては、文字やことば、すなわち「文」というものに比重が置かれた文化の総体を指す謂であり、文字や文と密接に関わり展開された学問のあり方そのものをいうもの、といえるかとも思うのです。

また、ヨーロッパの学知と東アジアの学問の枠組み、ということ、もう一つ興味深い課題だと思えるのは、書物の分類、ということです。先ほど、漢字文化は書物の文化、と申しましたが、ヨーロッパの学知と出会って以降、近代の東アジアの学問世界が直面した難問は、それまで長年かけて構築されてきた書物の分類法ではヨーロッパの書物と概念に対応できなくなってしまったことです。中国では、紀元一世紀の『漢書』藝文志以来、学知の世界を体系的に捉えるとともに、書物を分類し、順序を立てて排列し、それぞれの概念を説き、解題を附す、目録学とよばれる学問があったわけですが、その学問の基本的枠組みの転換が迫られたのです。しかし、二千年の伝統はそれほど簡単には転換できるものではありません。すると、図書館を作っても書物を分類配架できないという事態がおきるわけです。書物をどのようなカテゴリーのもとで分類し並べるのか、これは、大学の学部をどう設置し、どう名づけるかということとともに、東アジアが直面した学問の根幹に関わる問題だったのです。

さて、今日の武藤氏のお話は、中国の史学が日本の史学を参照し学んだ、ということでしたが、いま申しあげた、図書の分類、あるいは近代図書館の建設、ということについても、中国は日本のやり方を大いに参照していたようです。武藤氏のお話でも名前があげられていましたが、ここで、中国の学問の近代化に大きな影響を与えた人物として、服部宇之吉（1867-1939）のことを取りあげてみたいと思います。服部宇之吉は、北京大学の前身の京師大学堂の教習として、明治三十五年（1902）から四十二年（1909）まで在職していたということですが⁽⁸⁾、その際、日本の丸善などを通じて、大量の書籍を購

入し、大学の教科書として北京に届けさせていたことが、北京大学檔案館に保存されている檔案資料から知ることができます⁽⁹⁾。

なお、当時編纂された『京師大学堂講義』というテキストがありますが、心理学のほか、万国史の講義を服部宇之吉が担当していることにも注意を向けたいと思います⁽¹⁰⁾。

また、二十世紀初頭の、東アジアにおける書物と学問の様子を示すものとして興味深い資料があります。それは、1910年に編纂された『大学堂図書館図書草目』（北京大学図書館蔵、X/012/4796）の分類で、全四冊の書籍目録のうち、中文図書を著録する三冊が、伝統的な経・史・子・集の四部分類を基本として分類がなされているのに対し、「日本文図書」の目録にあてられた第四冊目のみは分類方法を異にし、歴史、地理、教科書、教育に始まる「近代的な」分類になっているのです。日本文図書に対してのみ、新しい分類概念が用いられていることは、1910年当時の中日の書物や学問の状況の相違を端的に反映していると思われる。

京師大学堂は、1912年に北京大学校と改称しますが、実はその後も1935年に至るまで、図書の分類方法が定まりません。それに対して、北京大学のもう一方の前身である、燕京大学は状況が異なります。アメリカ人宣教師の息子、レイトン・スチュワート（John Leighton Stuart）を校長として創建された燕京大学は、ハーバード・燕京学社の資金を得つつ、充実した図書館を備えるようになります。そして燕京大学では、1931年にハーバード燕京図書館と共同して、いち早く「中文図書分類法」を制定採用します。また、燕京大学図書館では、積極的に日本の公立図書館、大学図書館の状況を調査し、盛んに情報を収集していたことが、当時の図書館報などから知られます。

さて、その「中文図書分類法」は、中国の方法を経糸とし、西洋の方法を緯糸としたものだとすることで、その分類法は「経学」「史学」に始まる伝統の四部分類の面影を残しつつ、哲学宗教、語文学、美術といった新たな領域概念を併存する構成となっています。

▽燕京哈仏大学図書館中文図書分類法⁽¹¹⁾

- 100-999 経学類
- 1000-1999 哲学宗教類
- 2000-3999 史地類

- 4000-4999 社会科学類
- 5000-5999 語文学類
- 6000-6999 美術類
- 7000-7999 自然科学類
- 8000-8999 農林工藝類
- 9000-9999 叢書、目録類

そしていま注目したいのは、この分類法には、「社会科学」「自然科学」という分類はたてられているものの「人文学（あるいは人文科学）」という分類はないことです。前近代の中国及び東アジアに展開していた、包括的、総合的な「文」の学知の世界は、その体系が解体され、書物はそれぞれ、哲学・史学・文学など、「近い」分野を選んで分配されたわけで、当然そこには、概念のずれや不一致や居心地の悪さが抱え込まれてしまいました。そしてそうした「ずれ」や「不一致」は、今に至るまで東アジアにおける人文学研究の問題としてあり続けている、ということではないかと思えます。

しかしいま、私達はもうすでに、四部分類の旧体系に戻るわけにはいきません。それではどうすればよいのか、と考える時、当たり前のことではあります。やはり、これまでの学術と文化の歴史を常に振り返り、理解を進めること、そして、地域や領域をこえて広い視野から学術・文化の現状と意義を繰り返し追究していくことが重要なのではないかと思います。そうした点で、本日のシンポジウムは、安酸氏のお話にもあったように、西洋と東洋の別を超えて語ろうという、たいへん意義深い設定であったと思います。近年、国際シンポジウムが盛んに行われていますが、国内においてもヨーロッパと東アジア、それぞれを専門とする研究者が一堂に会して議論することはまだまだ多くありません。しかし例えば、逸見氏が研究されている『百科全書』には中国に関する記述もあるとのことで、既に注目されていることではあります。今後は、ヨーロッパから東アジアへ、という方向だけではなく、西洋と東洋、双方向の学術文化の伝播にも、これまで以上に関心が向けられるべきではないかと思えます。また、今回はあまり話題となりませんでした。日中以外の、韓国や台湾といった東アジアの他地域も含めて人文学を捉えていくことなど、国際的、学際的な学術交流を盛んに行うことが可能となった今こそ、新たな視点と方法による学問の新機軸を打ち出しているのではないかと予感します。

(11) 『燕京大学図書館報』第49期、1933年4月30日参照。

注

- (1) 『漢語大詞典』(漢語大詞典出版社、1990年12月第一版)には「人文科学：源出拉丁文 humanitas……現代用作“社会科学”的別称」とある。
- (2) 中国社会科学院のホームページには「肩负着从整体上提高中国人文社会科学水平的使命」とある。<http://cass.cssn.cn/gaikuang/> 参照。
- (3) 北京大学ホームページ <http://www.pku.edu.cn/schools/yxsj.jsp> 参照。
- (4) 復旦大学ホームページ <http://www.fudan.edu.cn/channels/view/61/> 参照。
- (5) 『易』賁卦・彖伝に「觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下」とあり、その孔穎達疏に「言聖人觀察人文、則詩書礼楽之謂、当法此教而化成天下也」とある。
- (6) 『懷風藻』序の原文には「檀原建邦之時、天造草創、人文未作。……調風化俗、莫尚於文。潤德光身、孰先於学」とある。
- (7) 『爾雅』は前漢の辞書。以下の項目に分類して漢字を掲出する。「積詁」「積言」「積訓」「積親」「積宮」「積器」「積樂」「積天」「積地」「積丘」「積山」「积水」「積草」「積木」「積虫」「積魚」「積鳥」「積獸」「積畜」。
- (8) 丹羽香「服部宇之吉と中国——近代日本文学の中国観への影響として——」(『中央学院大学人間・自然論叢』19、2004年3月) 参照。
- (9) 例えば、北京大学檔案館藏京師大学堂檔案・JS149-5 (1905年)は、服部宇之吉が購入した大学教科書のリスト(服部所交教育数学動物物理歴史五科書目)を含む資料、また同JS118-1(服部宇之吉購書の信件)は、服部宇之吉が京師大学堂のために日本から購入した書籍の費用の支払いに関する書簡である。
- (10) 北京大学図書館蔵『京師大学堂講義』初編の内容は、中国史講義(大学堂教習屠寄撰)・万国史講義(大学堂教習服部宇之吉講述)・中国地理講義(大学堂教習鄒代鈞撰)・経済学講義(大学堂教習日本杉栄三郎編)・倫理学講義(大学堂副総教習張鶴齡講述)・経学科講義(大学堂教習王舟瑶講述心理学講義)・心理学講義(大学堂教習服部宇之吉講述)、貳編の内容は、心理学講義(大学堂教習服部宇之吉講述)・掌故学講義(楊道霖撰)・中国通史講義(大学堂教習王舟瑶講述)・中国史講義(陳馮宸講述)・万国史講義(大学堂教習服部宇之吉講述)・中国地理志講義(大学堂教習鄒代鈞撰)・経済各論講義(於栄三郎撰)より成る。